

20085

冠動脈用自己拡張型ステント再狭窄に特異的な IVUS 所見を認めた 1 例

【目的】冠動脈用自己拡張型ステント Radius の再狭窄病変に特異的な IVUS 所見を認めたので報告する。【症例】既往歴:2000 年 AMI、#6:Nir3.0*25、#7:S6602.5*23 留置。2001 年 CABG (SVG-CX、SVG-RCA)を施行。2003 年バイパス閉塞により#1:S670 4.00*15、#2:MultiLink Tristar 3.5*18、#3:Radius 3.5*31 留置。EF30%、心不全は認めず経過観察。【経過】現病歴:狭心症状が出現したため CAG 施行。#3:90%、#4PD:75%、#13:100%、SVG-CX 0%、SVG-RCA:100%、RCA を責任病変と判断し PCI となった G.C:Heartrail2、G.W:sion blue、IVUS:Intrafocus2viewIT を使用した。【結果】Radius3.5×31 は全長にわたり 4.0mm まで拡張、新生内膜は低輝度成分が多くを占め内腔表面は高輝度成分が全周性に認められた。狭窄部に対し NSE3.5*13、DCB3.5*30 にて拡張した。【考察】Radius は自己拡張型のステントであり遠隔期にステントが拡大する。内腔確保の意味では有利ではあるが、その一方で血管壁に対するストレスが遠隔期において持続することにより遠隔期新生内膜の増大が起き不安定プラークの生成が惹起された事が示唆された。【結語】BMS 時代の再狭窄病変は製品特性の影響が大きく特徴的な所見を得た。